



TITLE:

京大広報 No. 170

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 170. 京大広報 1979, 170: 861-868

ISSUE DATE:

1979-01-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209518>

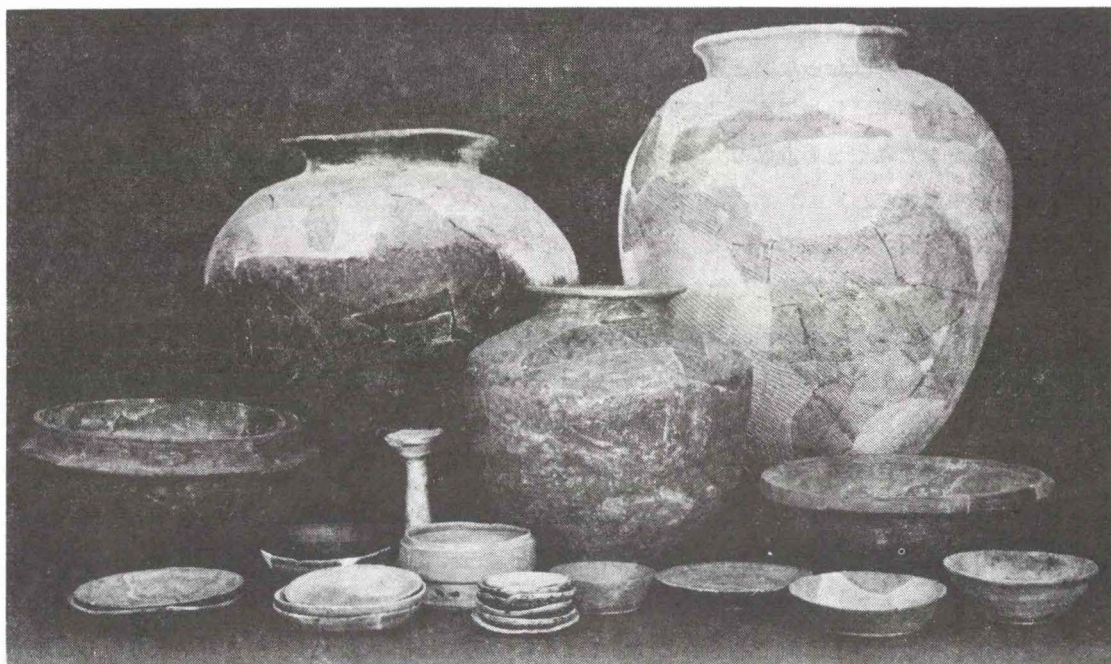
RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

京大広報

No. 170

京都大学広報委員会



古代・中世の日常容器

医学部，病院，北部各構内から出土した土器・陶磁器—関連記事本文7ページ—

目次

新年を迎えて……………総長 岡本 道雄…	2
新年名刺交換会……………	3
外国人留学生懇親会……………	3
自衛消防団員に感謝状贈呈……………	4
農学部附属農場長の交替……………	4
経済学部長の交替……………	4

〈随想〉	
中国人留学生の思い出……名誉教授 日比野丈夫…	5
〈保健コーナー〉	
健康長寿の願い、—運動と食物から—……………	6
〈紹介〉	
埋蔵文化財研究センター……………	7
訃 報……………	7
日 誌……………	8

新 年 を 迎 え て

総長 岡 本 道 雄

早くもまた本年も正月を迎えることとなった。総長として、6回目の迎春でありまたこれが最後の年でもある。1969年より本年までの10か年は卒直に言って大学紛争に明けくれたと言うことが出来よう。この10か年を振り返りその総括のもとに来年から1980年代を迎えようと思えば、そのための一年としてこの新春の意義も大きい。しかし、私共はこの10か年の日々といえども京都大学の来し方と将来とを考え、それぞれその時点で最善と信じる努力を積み重ねてきたのであるから、徒にこの10か年を紛争という面のみでとらえて深刻がるよりも、いち早く明日に向って明るく立ち上る努力を開始しなければならないと思う。

このような10か年は独り京都大学だけのことでなく、多少共日本の大学全部のことであり、また独り日本の大学のみでなく世界の大学が等しく味わった苦悩であった。今の時点で大切なのはいち早い立ち上りである。

まず私共が当面する問題について、そのうち本学の将来計画に関係のあると考えられるものの現段階の実情を述べて新春の夢としたい。

明るい夢としては、懸案の国際交流機構の一環として、国際交流会館の設置計画が実現に向けて進められている。またかねて本学の専門家の要望であったアフリカ研究センターといったものも実現の一步をふみ出したものである。100億に近いお金をかけたヘリオトロンも本年中には施設・設備を完成する予定である。

次は、教養部改善案であるが、かねてから教養部の改善については教養部内の委員会案として第三次までのものが出ており、今回のものは第四次案と言われている。その内容は科学基礎を専攻する大学院の設置である。教養部の誕生の基盤となった新学制施行以来、今日まで約30年教養部教育の中核をなす一般教育とは何であるかについては、この辺で総括が為されるべき時が来ていると思う。

一般教育についてはいろいろなとり方があり、またそれぞれの大学で異ってもよいと考えているが、本学が指向して来ているものは、フンボルト大学の精神としてあげられている「哲学による諸学の統一」とか、学問を通じての価値感の確立といったものが中心となるものと考えて来た。この点今回の科学基礎というのは、本学一般教育の基盤を養うのに最もふさわしいものと考えられ、検討を始めている。

また文部省は昨年8月、大学院問題懇談会の答申を受け、これによって大学院の充実を計って行くこととしているが、本学においては、かねて独自の立場から大学院の充実については特別に力を入れるべきだと考えており、各部局からの独自の提案を期待している。

更に、かねて新聞紙上で周知のとおり関西学術研究都市構想が検討されている。これについては本学としては直接かかわることなく今日に至っているが、全国的規模で関西に学術研究にかかわる施設を造るということになれば、本構想の今後の発展とその内容をみて本学としても主体的な取り

組みが必要となってこよう。その時には適当な委員会等を設けて検討することとしたいと考えている。

かねて先輩の総長から、京都大学の総長が学内の問題に忙殺されていて、外国に出て世界的展望を持つ機会を持たないようではいけないと注意されていたが、実際は中々実行出来なかった。この点を反省し、昨年1か年は中国、西ドイツおよび東南アジア諸国を訪れ、海外の視察に力を注いだつもりである。

隣の大国、中国では、1966年から吹きあれたプロレタリア文化大革命の嵐は1976年華国鋒体制の発足までの10か年、教育と大学を荒廃の極に陥れた。しかし、今やこの10か年の学術研究の空白は余りにも大きかったとの反省のもとに国を挙げてその回復にとりかかり、国内88の重点大学の早急な充実と共に大波のような幾千にのぼる留学生を欧米、日本に送り出そうとしている。1985年までに世界の科学技術の水準に追いつこうというのである。また、私共日本の大学が範としてとり入れたドイツの大学では、1969年以降の大学の紛争をきっかけとした行きすぎた大学立法を憲法裁判所で修正しつつ、その良識のある運営によって大学を正常化し、この間に失われた社会の大学に対する信頼をとりもどす事が大学の自治の根幹であるとして、新旧あらゆる大学が努力を傾けている。

東南アジア諸国の大学は、僅々30年の若い歴史ながらそれぞれの建国の中核としてかつて宗主国であった欧米とアジアの先進国としての日本に意欲的な目を向けつつどん欲にその発展に努力しており、フィリピン大学、マラヤ大学の広漠たる緑のキャンパスに見えかくれする新校舎のたたずまいを前に、発展途上国といったこれまでの東南アジアのイメージがふっとんでしまった。

私が昨年中に訪問出来た中国、西ドイツ、東南アジアにおける大学の実情とその感想については、この京大広報において次号から数回にわたって連載することとする。

何卒学術的に実りの多い一年であるよう明るい希望を持って出発したい。そして狭くこの日本の一角に立てこもることなく、世界にひらいた目でこの一か年を送りたいものである。

＜大学の動き＞

新年名刺交換会

本学恒例の新年名刺交換会が、1月4日午前10時から京大会館において、岡本道雄総長をはじめ名誉教授、教職員等約400人の出席を得て行なわれた。

まず岡本総長から、昨年5月以降年末にかけての中国、西ドイツ、東南アジア各国歴訪の結果を踏まえて「本学の一層の充実と発展に努めたいので、皆様のご協力をお願いする」との新年の挨拶があり、次いで平澤 興元総長の発声による乾杯ののち歓談、10時30分木村 廉名誉教授の発声により万歳を三唱し散会した。

新年名刺交換会はこれまで、本部大ホールで行なわれるのが通例であったが、今年は同ホールの

床下強度の面から多人数収容が不適當となったため、京大会館で行なわれたものである。

外国人留学生懇親会

本年度の外国人留学生懇親会が、去る12月11日午後6時から左京区松ヶ崎の「かんぽーる京都」で、総長はじめ留学生、教職員約300名が出席し盛大に催された。

この懇親会は、学生部が毎年12月に実施しているもので、遠く祖国を離れ、本学に在学している留学生が一堂に会し、日頃の研究生生活を離れて本学の総長・各学部長をはじめとする多数の教職員と、また留学生相互が国籍を超えて懇談し、お互いの理解を深めるための機会として昭和36年以来引き続き開催されてきているものである。



この日の懇親会は、岡本道雄総長の「京のまちに親しみ、地域とのかかわりの中で勉強にはげんでください」との挨拶に始まり、沢田敏男学生部長の発声による乾杯に続いて懇談に入った。

会が進むにつれて、韓国、タイ、マレーシア、アメリカ等、次々と各国の代表が自国の歌を披露し、更に岡本総長はじめ各教官からの歌も加わりきわめてなごやかな雰囲気うちに閉会した。

ちなみに、本学に在籍している留学生の概況（昭和53年10月1日現在）は以下の表のとおりである。

地 域 別

区 分 地 域	学部学生	大学院生	研修員 研究生	計
ア ジ ア	32	54	42	128
中 近 東		6	2	8
ア フ リ カ		1		1
オセアニア		2	4	6
北 米		1	30	31
中 南 米		2	6	8
ヨ ー ロ ッ パ		4	36	40
計	32	70	120	222

専攻分野別

区 分 地 域	文科系 学部、 大学院	理科系 学部、 大学院	研究所等	計
ア ジ ア	35	87	6	128
中 近 東		8		8
ア フ リ カ	1			1
オセアニア	2	3	1	6
北 米	16	6	9	31
中 南 米	1	7		8
ヨ ー ロ ッ パ	19	18	3	40
計	74	129	19	222

自衛消防団員に感謝状贈呈

去る12月20日午後2時から、本学自衛消防団による年末最後の消防演習が北部構内農学部総合館北棟を中心に行なわれ、同消防団の日頃の訓練成果が披露された。

このあと、日頃の自衛消防団員の苦労に対する総長からの感謝状が、本部事務局長室で贈呈された。この日感謝状を受けた団員は次のとおりである。

新谷真一（経理部技 官） 傍島 孝（経理部技官）
 浜田 陽（経理部事務官） 辻本和夫（経理部技官）
 柳田一成（経理部事務官） 祖上義一（病院技 官）
 本学には、すでに京大広報で紹介してきたとおり、非常事態に備え本部地区、病院地区、宇治地区のそれぞれに自衛消防団が設けられ活躍している。感謝状の贈呈は、自衛消防団員として委嘱または前回感謝状を授与されてから引き続き5年間を経過した者に対し、昭和45年から年末最後の消防演習の日に行なわれている。

<部局の動き>

農学部附属農場長の交替

1月1日、苫名 孝農学部附属農場長の任期満了に伴い、その後任として山縣弘忠 農学部教授（育種学講座担当）が任命された。任期は、昭和55年12月31日までである。（農学部附属農場）

経済学部長の交替

1月10日、平井俊彦経済学部長の任期満了に伴い、その後任として高寺貞男経済学部教授（会計学講座担当）が任命された。任期は、昭和55年1月9日までである。（経済学部）

保健コーナー

健康長寿の願い —運動と食物から—

人間共通の願いである健康長寿のためには、どうすればよいのであろうか。

人間の体格、素質は親から受け継いだ遺伝因子と、生後の環境因子に規定されているので、生きていく活力とスタミナ即ち健康長寿についても、双方の影響を受けていることは間違いなさそうである。遺伝因子がどの程度に関与していようと、我々がアプローチできるのは環境因子だけである。数多くの環境因子の中で、関心の深い運動と食物についてふれてみたい。

運動からみて

運動が健康に良いことについては喋々の要もない。特に体力の保持増進に良いことは運動生理学の教えるところであって、小学校から大学までの学校教育に体育が必須科目とされている理由である。ただ、体力増進に最も効果的であるのは小・中・高校の年代であって、大学生年令における効率は既にかなり低くなっている。鉄は熱いうちに鍛えよ、である。しかし、大切なことは運動によって増進した体力は、これを止めると元に戻ってしまうことも多くの研究の示すところであり、生涯体育の必要性が叫ばれる理由である。文部省が行なっている壮年体力テストでは、日頃から運動をしている者とそうでない者との体力差は、年令的に数年～10年の開きがあることを示している。

しかし、体力に関しては、現代の文明社会に生きていくのに、箸と茶碗、あるいはペンと書物を持つ力があれば十分ではないかとする理屈もあり得ようが、そのような境遇の人々でも優れた体力が望ましいことには変わりはない。

一方、病気に罹らない抵抗力（防衛体力と呼ばれる）に関して、運動の効果はどうであらうか。

特定の運動を始めてから、カゼ一つひかなくなった、胃腸が丈夫になった、とよく言われるが、これらを肯定するだけの確証は見当たらないようである。その他の病気についても事情は同様である。ただ、筋肉労働者は坐業者に比べて冠動脈性心疾患（狭心症や心筋硬塞）が著明に少ないこと、また成人病の進展に関与する体内脂肪を運動が減らすことは明白であり、運動が循環器系および代謝系の成人病の発症を抑止する可能性はきわめて大きい。

さて、運動によって延命効果が期待されるであらうか。

運動選手の生存率に関する多数の調査、体育指導者の寿命調査、各種職業別の平均寿命調査などから見ると、運動は寿命を縮める作用もない反面、延命効果としては歴然たる効果を期待できないと言わざるを得ない。ただし、上述のように、一部の成人病の予防効果の結果としての延命効果は十分に考えられよう。

食物からみて

食物の量および質が発育発達にきわめて大きい影響のあることは言うまでもない。戦後の日本人の体格が急激に良くなった主因は、社会経済環境の向上に伴う良質の食物に負っていることに異論はない。最近の国民栄養調査によれば、熱量、蛋白質、鉄、ビタミンB₁、Cは栄養所要量を上回っており、カルシウム、ビタミンA、B₂のみが下回っている。

食物に関する長寿法の秘けつは古くから多くの言い伝えがあるが、研究面では疫学的な実態調査と動物実験に基づいた論議が多い。

熱量、蛋白質、脂肪の摂取が多い村落が長命村であるとした報告があるかと思うと、肉食は少なく、野菜、豆腐、海苔の多い移民一世が、肉食の多い二世より長命であるとする報告、また、白米を少なく、野菜、麦、大豆、豆腐、小魚、海藻の多食を長寿の主要条件とした広範な実態調査がある。年をとるにつれて油っこい食餌より、淡泊な食品を好む傾向があるが、神が授けた智慧かも知れない。

動物実験では、高い栄養よりも、低水準の栄養の方が長命であるとする観察がある。

老化と寿命には自然環境、社会—生活環境からの無数の因子が関与しているほかに、各因子が相互にからんで影響し合っているので、疫学調査の中から直ちに栄養因子のみを抽出して結論づけることには無理があろう。今のところは動物実験に頼らねばならぬであらう。

結 び

若者の年代には、十分な食物をバランスよく摂りながら、運動で鍛えること、そして、壮年期以後には、運動を続けながら、年令層に見合う食物

の量と質の調和を保つこと、それが健康長寿につながる可能性が強いと言うより仕方がない。

健康長寿の諸条件を運動と食物の側面から単純

に引き出そうとしたところに問題はあるにしても、その顔はのぞかせているようにも思われる。

(保健管理センター・文責 北村)

< 紹 介 >

埋蔵文化財研究センター

埋蔵文化財研究センターは昭和52年7月5日に学内措置として設立された新しい組織である。センター長は文学部の樋口隆康教授で、関係部局の教官6名と本部事務局長・施設部長からなる運営協議会のもとに、研究部と事務室が活動している。

文化財とは、人類が出現して以来の活動の所産であり、埋蔵文化財は、そのうち地中に埋れているものである。埋蔵文化財の代表的なものは、建物址・墳墓のような遺構と土器・石器・金属器などの遺物である。しかし地中には、このような考古学や建築史学の研究対象となるものばかりではなく、文献史学・地質学・動植物学をはじめとする関連諸分野の研究対象となる貴重な資料が埋れている。そして、この多くの分野の研究成果を総合することが、埋蔵文化財の研究には欠かせないのである。

京都盆地では、旧石器時代から人々が活動し、平安時代にはこの地に都がおかれ、現代に至っている。その間、ほとんど絶えることなく人々が居住してその足跡を残しているが、京都大学のキャンパスは、このような遺跡が多数存在する場所にある。

最近になって大規模な開発が多くなり、貴重な埋蔵文化財が失われる事態がしばしばおこっているが、このようなことを防ぐため、キャンパス内の埋蔵文化財を調査し、その研究と報告を行なうことが当センターの主要業務である。そのため、発掘調査の実施にあたっては計画を立案し、

調査班に班長を派遣する(調査班は学外組織の京都大学構内遺跡調査会 会長・亀井節夫理学部教授のもとに編成される)。そして各遺跡調査ごとに成果と研究をまとめた京都大学埋蔵文化財調査報告書を出版する一方、毎年その年度に実施した調査の概要と、より広い研究とを合わせた京都大学構内遺跡調査研究年報を刊行している。また重要な遺跡については、建設と保存の調和をはかる必要があるが、本年度に北部構内で発見した貴重な火葬塚を関係各位の尽力によって保存できたことは特筆に値する。

当センターの主要な活動は以上のとおりであるが、今後の課題も多い。建物新営等の工事の規模が大きくなるに従って、出土する遺物も膨大な量に達しているが、これを研究・報告するとともに、主要なものを展示して学内外の人々の知見に供さねばならない。しかし現在の構成員では年々増大する建物計画に対処できなくなっている。官制の組織になっていないための障害も多く、また十分な施設もない。このままでは大学のキャンパス計画にも支障をきたしかねない状況にある。

当センターの設立から今日に至るまで、多大なご協力をいただいた方々に改めてお礼を申し上げるとともに、今後の官制化をはじめとする組織の確立と活動の充実に、深いご理解とご助力をお願いするものである。

なお出土遺物は当センターの一室(本部構内西門の南)に、ごく一部ではあるが展示しているので、いつでもご覧いただきたい。

(埋蔵文化財研究センター)

計 報

荒田 信子(医学部事務官)

12月27日逝去、45歳。昭和30年医学部附属病院勤務、同46年医学部に配置換以後図書業務に従事。昭和51年本学永年勤続者表彰(20年勤続)。

安田 美術(経理部事務官)

12月27日逝去、39歳。昭和45年経理部守衛として勤務。

藤田 義象(本学名誉教授・工学博士)

1月3日逝去、82歳。本学工学部卒。昭和10年本学工学部教授就任、同21年退官。昭和16年勲三等瑞宝章受章。専門は物理探鉱学、採鉱学。

猪熊 兼繁(本学名誉教授・法学博士)

1月7日逝去、76歳。本学法学部卒。昭和22年本学法学部教授就任、同41年停年退官。昭和47年勲三等瑞宝章受章。専門は日本法制史。

日 誌

(1978年12月1日～12月31日)

- | | | | |
|-------|--|-----------------|---|
| 12月2日 | 中国科学院科学技術視察団 副団長 張 莫棠
氏外2名来学，総長および関係教官と懇談 | 来学，総長および関係教官と懇談 | |
| 6日 | 同和問題委員会 | 18日 | 総長，東南アジア諸国における高等教育・研究機関等の視察および学術研究に関する意見交換のためフィリピン，インドネシア，シンガポール，マレーシア，タイおよび香港の各国を訪問（30日まで） |
| 11日 | 学術講演会（全学） | | |
| 〃 | 外国人留学生懇親会 | | |
| 〃 | 化学研究所研究発表会 | | |
| 12日 | 評議会 | 〃 | 国際交流委員会 |
| 13日 | 総長，職員組合と交渉 | 25日 | 附属図書館商議会 |
| 16日 | 中国大学学長代表団 団長 匡 亜明氏外7名 | 27日 | 環境保全委員会 |

